漱石山房記念館だより

第16號

CONTENTS

特集　御米という女
　　作家　堀真潮 …… 2
展示報告 …… 4
活動報告 …… 5
漱石山房記念館所蔵資料の紹介 No.16 …… 6
　　芥川龍之介　松岡譲宛書簡　大正５(1916)年12月17日付
ミュージアムショップ …… 7
リレーエッセイ 第13回　夏目漱石作品を朗読で味わう …… 8
　　フォーエバーリーディング　葉月のりこ
ミュージアムめぐり第７回　みやこ町歴史民俗博物館 …… 8

特集

御米という女

作家　堀 真潮

彼氏の友達とデキちゃった――

ある日、友達からそう言われたら、あなたはどう答えるだろう。

『門』の登場人物のことを考えていた時に、ふと思いついた問いだ。

私は、実際にこの質問を複数の女性にしてみた。

みな一様に戸惑いの表情を浮かべて、少し考えてから「引く」とか「それはない」とか否定的な意見を述べる。

たまたま近くにいたのが女性だけだったので、偏ったデータしかないが同じリアクションをする人が多いのではないだろうか。

つまり御米のやったことは、そういうことなのだ。

それは『それから』の三千代も同じなのだが、彼女には結婚前から代助と知り合いだったという事実と、ロクでもない夫の存在が作品中にしっかり書かれている。

三千代なら「そういう時こそ、夫を支えるのが妻の役目じゃなくて?」とたしなめたり、反対に「そんな夫なら捨てておしまいなさいな」という女友達がいたかも知れない。

女学校に通っていたという過去からも、なんとなくそういう生身の人間としてのやりとりが、存在の現実味に繋がっているように私には感じられる。

だが、御米にはそれがない。

御米の家族も、安井と出会うまでの過去も、作中では何も書かれていない。

長く横浜にいた、という安井の言葉から、二人が出会ったのは横浜ではないかと推測されるが、あくまで推測である。

つかみどころがなく、それは宗助にとっての御米との出会いが格子越しであることが象徴しているように思える。

二人は「うまくいっている夫婦」ではあるが、そこには「うまくいっている夫婦でいるための距離」が存在しているからではないか。

御米は占い師に言われたことを宗助に黙っていたし、宗助は安井のことを、少なくとも物語の間中は話していない。お互いに全てをさらけ出すことはできない夫婦であり、だからこそ一緒に居られるのではないだろうか。

御米が、安井ではなく宗助を選んだ理由がその辺りにあるのだとしたらどうだろう。

あくまで仮定だが、御米は、必要以上に自分に踏み込まれることを好まなかったのではないだろうか。その点で、御米と宗助の価値観は一致している。

安井と御米の仲についても、安井が病弱であること以外、例えば三千代の夫である平岡のようなダメな男であるという記述はない。

むしろ仲は良さそうに見える。

御米と宗助が惹かれあっているのだろうなという場面はほのかに描かれているが、安井を裏切る決定打については書かれておらず、『それから』に比べると淡々として生々しさに欠ける。

それが、いきなり宗助の苦悩である。

生死の戦いとか、青竹をあぶって油を絞るほどの苦しみとか、それまでの静かな描写とは打って変わって、強い表現が続く。

にも関わらず、肝心なところは読者に伏せられる。もどかしい。

多くの人が『門』のヒロインである御米について語ってはいるが、その実像は酷く曖昧だ。

どれも憶測であり「自分の考える御米」である。

『門』（初版本）
明治 44（1911）年
装丁：橋口五葉

発表する人の地位や声の大きさによって主流は決まるようだが、本来読み手の受け取り方に正解はないはずだ。

読んだ人それぞれに御米像があり、それは他の作品含めあまたの登場人物の中でもバリエーションに富んでいるのではないかと想像する。

創作者にとっては、とても興味深い存在だ。

百人いれば百通りの御米の過去がある。

さらに複数回読んだ人の中には、私のように読むたびに御米の印象が変わった人もいるのではないだろうか。

以下はあくまで私個人の感想・推測（妄想）である。違う、と感じる人もあるだろうが、あくまで私個人の意見なので、気に入らなければそっと冊子を閉じて、自分の御米像をパソコンでもノートでも好きなものに書き綴って欲しい。

最初に読んだ時、私から見た御米は「明治の強い女」だった。

現代の女の強さが不条理な現状を打破していく強さだとしたら、当時の女の強さは不条理や業を、たとえそれがとても辛いものだとしても、受け入れ飲み込むことができる強さだ。

宗助が逃げ回っているのに対し、御米は不貞という自分の罪と子を失うという罰を、涙を流しながら嚥下した女のように見えた。

だが、二度三度と読むうちに、その印象が変わってきた。

罪を受け入れているという点は同じだが、覚悟を持ってというわけではなく、そうしなければならないからそうしただけなのではなかろうか。もしかしたら御米は抗うことをしない女なのではなかろうか。流されるまま生きてきて、やがて岸辺に流れ着いた落ち葉のように宗助の元に落ちついただけではないだろうか。だが、本当にそれだけだろうか。

そう考えると、御米というキャラクターが俄然面白くなってきた。

多くの人が推測しているように、御米と安井が出会ったのは横浜だと思われる。

その後、安井は御米を京都に伴うが、宗助にも妹と紹介し人目を忍んでいるところからも正式な夫婦ではなく内縁関係だったのだろう。

そのことから、私は御米が堅気の女ではなかったのではないかと考えた。

当時の横浜には、ホテルやカフェー、ダンスホール諸々がいっしょくたになっていて何をやっているかわからないことから「チャブ屋」「あいまい屋」と呼ばれる外国人相手の店があったが、御米はそういう場所で働いていた女ではなかったか。

だが、安井や宗助といったインテリ学生を魅了していることから、大佛次郎の『花火の街』のお節のような落ちぶれた元武家の娘だった可能性がある。

不幸な境遇から自分の感情をほぼ失くしてしまっていた御米は、安井に求められるまま京都まで行き、宗助に誘われるまま広島へと付いて行った。

宗助と安井の間には友情があったが、御米は安井に対して、友情に比べれば吹けば飛ぶ程度の感情しかなかったのではないか。

さらに読んで、妄想にミステリーやホラー要素も加えると、もしかしたら御米は計算の上で、病弱な安井ではなく、当時は快活で資産もあった宗助に乗り換えた可能性もあったのではないかと思えてくる。宗助があのまま貧しいままで、他に都合の良い男が現れたら、御米は安井を捨てた時のように、一度たどり着いた岸から再び離れて流されるまま付いて行ったのではないか。

もちろん、物語は殺伐としたものにはならず、春を迎えて終わる。

また、御米が子を失っているのは、当時の家庭小説の流行設定である不義の代償というのもあるだろうが、私はヒロインをヒロインたらしめる要因として子を奪われたのではないかと考えている。

男を乗り換えた既婚者であったにも関わらず、女の生々しさよりも少女性を匂わせているのは、子を失うという悲しみと引き換えに、母となれば失われてしまうものを損なわずに済んだからではないだろうか。

庇護欲を掻き立てられる風情と、誰かを傷つけることのできる残酷さ。

それは少女の持つ二面性に他ならない。

いろいろ語ってはきたが、御米という女が二人の男を翻弄し、宗助に全てを捨てさせた運命の女（ファム・ファタール）であることだけは間違いない。

〈了〉

Profile

堀 真潮（ほり・ましお）

2016年「瓶の博物館」で第1回ショートショート大賞受賞。同年12月『抱卵』でデビュー。2018年アンソロジー『ショートショートドロップス』（KADOKAWA）に作品収録。

展示報告

《通常展》夏目漱石と漱石山房　其の一

令和5年12月23日（土）～令和6年4月21日（日）

※2月27日に展示替え。

当館は、多くの方からの寄贈や「新宿区夏目漱石記念施設整備基金」の活用により貴重な資料を収蔵することが出来ました。本展示では、当館の代表的な資料となる「松岡・半藤家資料」や、近年新たに収蔵された資料を中心に、夏目漱石と漱石山房の歴史をたどりました。

展示は6コーナーで構成しました。**「漱石作品の関係資料」**では、新たに収蔵した「虞美人草」に関する、漱石が渋川玄耳に宛てた書簡を紹介しました。原稿用紙90枚（連載20回分）が出来ていると東京朝日新聞社の渋川に伝えたものです。この一週間後に連載が始まりました。**「漱石の書画」「漱石の漢詩と俳句」**では、漱石が描いた玉澗（ぎょくかん）（南宋の画僧で水墨山水を能くした）風の山水画を門下生の松根東洋城が称賛したため、その山水画を後日進呈する旨と、画の出来映えについて語った同氏宛の書簡を展示しました。このように残された漱石の書画や漢詩・俳句などからは、漱石の文人的性向を垣間見ることが出来ます。**「漱石ゆかりの品々」**では、平成19（2007）年まで発行されていた漱石肖像の千円札などを展示しました。シリアルナンバー「2番」は、漱石ゆかりの新宿区に割り当てられ、当館で所蔵しています。

明治29（1896）年、漱石は中根鏡子と結婚し、二男五女の子どもをもうけました。長女筆子は、漱石の死後、漱石晩年の門下生のひとり松岡譲と結婚します。その四女が当館名誉館長の半藤末利子氏です。**「「松岡・半藤家資料」より」**では、末利子氏からご寄贈いただいた漱石が家族に宛てた書簡や葉書を展示しました。家族を想う漱石の温かい人柄が伝わってきます。**「新収蔵資料コーナー」**では、鏡子夫人が使用した毛皮のマフラーなどを展示しました。

会場には、これまで本誌に掲載してきた「漱石山房記念館所蔵資料の紹介」頁から展示資料の掲載頁を印刷し、お手に取って一覧できるよう配布スタンドを設置しました。

来館者からは、「書画にフォーカスした展示に驚きがありました」「とても見やすくシンプルで、より世界観を味わうことが出来た」という声をいただきました。

展示は今後も、新収蔵資料を新たに加えながら、「其の二」「其の三」と続けていく予定です。お楽しみに。

《通常展》テーマ展示『門』―夏目漱石の参禅―

令和6年4月25日（木）～7月7日（日）

※6月18日に展示替え。

漱石の鎌倉円覚寺参禅130年を記念して、漱石と禅の関わりについて紹介する展示会を開催しました。

漱石は、明治27（1894）年の年末から翌年初めにかけて、10日間程鎌倉円覚寺に参禅しました。この参禅の理由について明確に記された資料はないのですが、**「第一章 漱石と禅」**のコーナーでは、米山保三郎ら漱石周辺における居士禅の流行を示す資料や、漱石が子規に宛てた手紙、東慶寺所蔵の漱石参禅名簿などを展示し、その要因について探りました。また、漱石は大正元（1912）年にかつての参禅時の老師・釈宗演と再会するのですが、その時の資料も展示しました。

「第二章『門』に描かれた参禅」のコーナーには、悟りを開くことができず帰ったこと、円覚寺境内の様子、釈宗演や世話を受けた釈宗活の風貌など、明治27（1894）年の参禅体験がよく反映された小説「門」（明治43（1910）年大阪と東京の朝日新聞連載）の写実的な描写の文章を抜き出して、円覚寺境内を写したモノクロ写真と合わせたパネルを展示し、作品の世界観をお楽しみいただきました。また、東北大学附属図書館からは、漱石旧蔵の『禅門法語集』の漱石が書き込みをした部分の画像をお借りして、漱石の禅研究の一端を紹介しました。

「第三章 若き雲水との交流」のコーナーには、大正3（1914）年からはじまり、漱石が亡くなるまで続いた、二人の20代の神戸の雲水（修行僧）たちと漱石の交流について、漱石から雲水たちに宛てた手紙をもとに紹介しました。この雲水の一人・富沢敬道（珪堂）は後に漱石が円覚寺参禅時に止宿した帰源院の住職になったことから、富沢宛の漱石の手紙や書画が帰源院に伝わっています。またこのコーナーには、漱石が亡くなったことを知った夜に富沢が漱石の未亡人・鏡子に宛てた手紙も、県立神奈川近代文学館からお借りして展示しました。初公開資料です。いずれの資料も、漱石晩年の禅に対する姿勢を明確に示しており、来館者の関心を集めました。

漱石と禅を特集した今回の展示会は、大本山円覚寺、帰源院、東慶寺のほか、六十年以上にわたり漱石を顕彰されてきた鎌倉漱石の會の多大なご協力のもとに開催されました。

活動報告

イベント報告

俳句連続講座
「漱石の俳句・子規の俳句 ― 贈り合う言葉」

令和５年 12 月 16 日（土）、令和６年１月 20 日（土）

大変好評だった昨年に続き、俳人の神野紗希氏をお迎えして、俳句講座を開催しました。第１回の講座では俳句の歴史や「挨拶句」などの文化的背景をふまえながら、夏目漱石と正岡子規の俳句を読み比べ、解説していただきました。講座の最後に兼題を発表し、参加者には次回の講座までに投句を済ませていただき、第２回の講座では「句会体験」として、実際に選句、披講、合評を行いました。

また、特選句、入選句、そして最も多く選ばれた句を詠まれた方には「会場賞」として、漱石山房記念館からささやかな記念品を贈呈させていただきました。

参加者からは、「神野先生のお話がわかりやすく、明るく、楽しい講座でした。またぜひ開催してください」「句会で多くの俳句を合評していただけて、とても嬉しかったです」などの感想をいただきました。

夏目漱石誕生記念
２月９日朗読会

令和６年２月９日（金）

漱石山房記念館では毎年、夏目漱石の新暦の誕生日である２月９日に朗読会を開催してきました。今年度ご出演いただいたのは、神楽坂朗読サロン、ふみのしおり（新宿歴史博物館ボランティア朗読の会）、フォーエバーリーディング、～近代文学を訪ねて～「みちくさ」の４つの朗読団体です。平日の開催でしたが、開場前から朗読を心待ちにされているお客様が集まり、温かな雰囲気に包まれて朗読が始まりました。４団体の皆様が重ねてきた練習の成果が発揮された朗読に、会場は大きな拍手で包まれました。

九日会
真野響子、漱石を声にする

令和６年３月９日（土）

「九日会」は漱石の逝去から１ケ月後の大正６（1917）年１月９日に、門下生らが漱石を偲んで集い、以後は昭和初期まで月命日の９日に開催されました。漱石山房記念館ではこの「九日会」にちなんで、漱石に関連する講演を行っています。

今回は俳優の真野響子氏による朗読と講演を開催しました。第１部では会期中であった《通常展》「夏目漱石と漱石山房其の一」の展示品から「夏目金之助　夏目筆子宛て葉書　大正元（1912）年８月15日」や「夏目金之助　夏目鏡子宛て書簡　明治 35（1902）年３月10日」、「夏目金之助　弓削田精一宛て書簡　明治 44（1911）年10月４日」と、その関連資料について朗読を交えてご紹介いただきました。第２部では、夏目漱石「夢十夜」より第一夜、第二夜、第六夜を朗読していただきました。特に第一夜は英訳での朗読もあり、参加者からは「夢十夜は最高です。真野さんのライフワークとして、特に英訳の第一夜はとても感動しました」という感想や、「手紙の紹介から、漱石の人となりの一端をうかがい知ることができました」など、展示内容をより深く知ることができたという多くの感想をいただきました。

レガスまつり 2024
～新しい自分に出会う春～

令和６年４月 13 日（土）

展示観覧料が無料となったこの日、観覧いただいた方にオリジナルキーホルダーや花苗をプレゼントしました。昨年に続き実施した「オリジナルしおりづくり～漱石の言葉を持ち帰ろう～」にも多数の方にご参加いただき、「大人も子どもも楽しめる企画でよかったです。毎回楽しみにしています」「ぜひまた漱石を身近に感じられるイベントを催していただきたいです」などの感想をいただきました。

その他、当館学芸員が展示の見どころを解説するギャラリートークや、ボランティアガイドによる再現展示室の解説なども行われ、たくさんのお客様で賑やかな１日となりました。

漱石山房記念館
所蔵資料の紹介

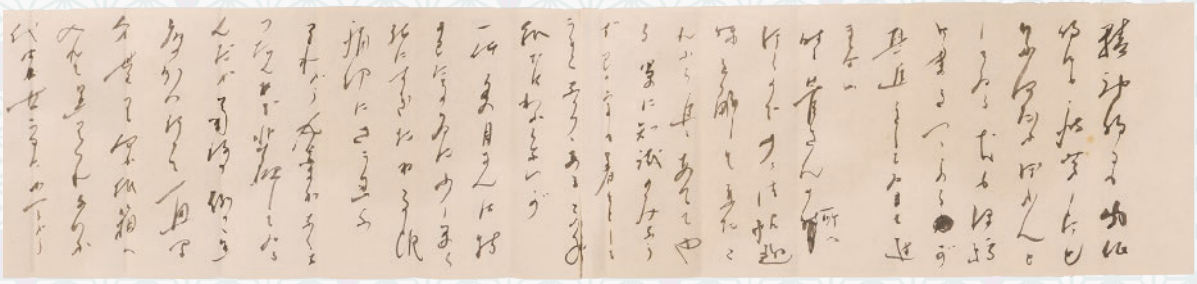
No.16

芥川龍之介 松岡譲宛書簡

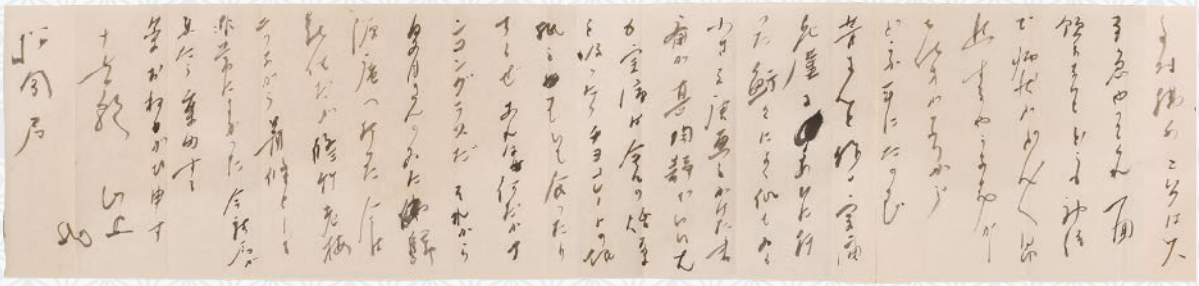
大正5（1916）年12月17日付
（松岡・半藤家資料）

芥川龍之介は大学三年の大正4（1915）年11月からほんの一年ほど木曜会に参加した漱石最晩年の弟子ですが、「鼻」を激賞され、その後の作品についても的確な批評をもらうなど、漱石から多大な影響を受けました。大正5年12月9日に漱石が亡くなると、芥川は11日の通夜に参列し、12日の葬儀では受付をしました。この手紙は漱石の葬儀から五日後に、共に第四次『新思潮』を創刊した友人・松岡譲（のちに漱石長女・筆子と結婚する）に宛てて書かれたものです。「一体夏目さんは特に己たちの為に少し早く死にすぎたね」という一文に、芥川の深い悲しみがにじみ出ています。文中の「菅さん」は、芥川の一高時代の恩師で、漱石の親友でもあった菅虎雄です。菅は鎌倉に住んでおり、12月から横須賀の海軍機関学校教授嘱託（英語学）に就任した芥川に下宿を紹介し、親しくしていました。菅はまた、漱石周辺では古参の居士としても知られ、明治27（1894）年、年末の漱石の円覚寺参禅時に紹介状を書いています。漱石は円覚寺塔頭・帰源院に止宿して釈宗演老師の提撕（ていせい）（禅の指導）を受けました。釈宗演は後年、菅や漱石の仲介により南満州鉄道株式会社から依頼を受けて満州を巡錫（じゅんしゃく）し、漱石の葬儀では導師をつとめました。この手紙で芥川は宗演に面会した後で漱石を偲んで帰源庵（院）に行ったと書いていますが、よほど気に入ったらしく、二日後に友人の井川恭に宛てた手紙にも、帰源院の門の額から庭まで皆気に入ったと書いています。「精神的にも肉体的にも疲労した」芥川にとって、漱石がかつて籠った帰源院は一時でも安らぎを得られる場所だったのでしょう。

（漱石山房記念館学芸員　鈴木希帆）



精神的にも肉体
的にも疲労したと
いふ何だかぽかんと
してゐる　尤も原稿
は書きつつあるが
甚遅々としてゐて進
まない
時々菅さんの所へ
行くので少々法帖趣
味を解して来たこ
れから追々あててや
る　単に知識のみなら
ず己の字も着々として
うまくなりつつある　この手
紙ではわからないが
一体夏目さんは特
に己たちの為に少し早く
死にすぎたね　この頃
痛切にさう思ふ
それから丸薬がなくな
ったんで悲観してゐる
んだが菊坂の例の医
者の所へ行って一週間
分貰って何か紙箱へ
入れて送ってくれないか
代は廿二日にかへるから



その時払ふ　こいつは大
至急やってくれ　一回
飲まないとどうも神経
で症状がどんどん昂
進するやうな気がし
て仕方がないから
どうか平にたのむ
菅さんと昨日宗演
老漢にあひに行
った　魴々（ほうほう）によく似てゐる
小さな唐画をかけた書
斎が甚閑静でいい　尤
も宗演は金口の煙草
を吸ったりチヨコレートの銀
紙をむいて食ったり
するぜ　あれは何だかイ※
ンコングラスだ　それから
夏目さんの為に帰
源庵へ行った　今は
無住だが修竹老梅
二つながら蕭條（しょうじょう）として
非常によかった　今度君が
来たら案内する
薬おねがひ申す
以上
十七日朝　龍
松岡君

※翻刻中のルビと脱字は『芥川龍之介全集　第十八巻』（岩波書店）を参照して補いました。
※インコングラスはincongruous、調和しない、一致しないの意。

ミュージアムショップ

漱石山房記念館オリジナルグッズ 売れ筋ランキング BEST 5

当館ミュージアムショップでは、図録・オリジナルグッズ等を販売しています。その中から、昨年度人気の高かった 5 種類の商品をご紹介します！ ※売上額順

1位 漱石山房記念館ガイドブック

価格：1,000 円（メンバーズ倶楽部会員 800 円）

漱石と新宿、漱石の人物と生涯、漱石山房等、夏目漱石にまつわる基本情報をまとめた 1 冊です。令和 4 年 3 月に内容の一部を改訂し再販しています。中には、漱石の史跡めぐり地図もありますので、記念館を見学した後に訪ねることもできます。

2位 ブックカバー『四篇』

ご好評につき売り切れました

価格：1,000 円

昨年 9 月に新商品として販売を開始しました。明治 43（1910）年に春陽堂から発行された『四篇』初版本の装丁デザインをモチーフに作成しました。とても人気のある商品であったため、既に売り切れとなりました。今年も 9 月に新たな初版本デザインのブックカバーを作成する予定です。

3位 トートバッグ（ネイビー）

価格：1,000 円

夏目漱石の代表作『吾輩ハ猫デアル』の初版本下編カバーのデザインを用いています。内ポケットの付いた帆布製のバッグです。持ち手部分が少し長く、肩掛けにもできます。カラーはナチュラルもあります。

4位 漱石の言葉 日めくりカレンダー

価格：1,200 円

1 日 1 日カレンダーをめくるごとに、心に染みわたる漱石の言葉に出会えます。この言葉のいくつかは、記念館の通路展示で取り上げているものです。これがあれば、家でも気軽に漱石の言葉を味わえます。

5位 和紙ステッカー「吾輩ハ猫デアル」

価格：200 円（3 枚セット）

橋口五葉がデザインした『吾輩ハ猫デアル』初版本の表紙、上編・中編・下編のステッカーです。和紙の質感とデザインの調和が人気の秘訣です。

※価格はすべて税込です

〈問合せ〉新宿区立漱石山房記念館 ミュージアムショップ担当

電話：03-3205-0209　FAX：03-3205-0211

詳細はミュージアムショップのウェブページをご確認ください。
https://soseki-museum.jp/user-guide/museum-shop/

今年度も新しいオリジナルグッズが登場する予定です。ご来館の際にはぜひミュージアムショップにお立ち寄りください。

ミュージアムめぐり 第7回
みやこ町歴史民俗博物館

「自他ともに認める漱石最愛の弟子」として知られる小宮豊隆は、みやこ町犀川久富の出身で、漱石作品『三四郎』の主人公・小川三四郎のモデルとされています。

小宮は旧豊津藩校育徳館の後身・旧制豊津中学を経て一高・東京帝大へと進学。その際、漱石に在学中の保証人となってもらった縁で漱石山房へ出入りするようになり、漱石から可愛がられて家族同様の存在となる一方、木曜会や門弟間の中核的存在へと成長しました。

漱石没後は漱石の研究に没頭し『漱石全集』や『漱石伝』を編著する一方、漱石本人は勿論、全集等の編纂時に漱石ゆかりの資料を遺族や関係者から譲り受け、貴重なコレクションを形成しました。それらの資料は遺族により大切に保管されてきましたが、平成25(2013)年に小宮三女の里子氏から「故郷で役立てて欲しい」と当館に寄贈され、これを受けて新設された「小宮豊隆記念展示室」で常設展示されています。

みやこ町歴史民俗博物館

住　　所　福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
T E L　0930-33-4666／入館料 大人200円 高校生以下100円
（※団体料金あり／20人以上）
開館時間　9:30～17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　月・祝日の翌日・年末年始
この他の詳細は下記ウェブサイトでご確認下さい
みやこ町デジタルミュージアム　http://www.miyako-museum.jp/

お知らせ
現在開催中の展示

《通常展》テーマ展示

漱石山房記念館 初版本コレクション

会　期　開催中～10月6日(日)

漱石山房記念館が所蔵する夏目漱石の初版本を一挙公開します。
随所に漱石の思いが込められた初版本コレクションをご堪能ください。

特集は作家の堀真潮さん、リレーエッセイは朗読会主宰の葉月のりこさんにご寄稿いただき、また、表紙絵は引き続き中川学さんにデザインいただきました。ありがとうございました。

今年度のリレーエッセイは、2月9日朗読会の参加団体の内3団体にご担当いただく予定です。

ミュージアムめぐりでは、今年度の特別展で取り上げる小宮豊隆の出身地で、関係資料を多く所蔵するみやこ町歴史民俗博物館をご紹介しました。10月より開催の当館特別展と合わせて足を運んでいただけたら幸いです。

引き続き新宿区立漱石山房記念館をよろしくお願いします。

表紙のこぼれ話

「こころ」の象徴的な1シーンに何を描いたらいいのか? 悩んだ末、話中に出てくる大きな金魚鉢が浮かびました。金魚鉢の暗い水の中をくるくる泳ぐ金魚がなんとなく「こころ」っぽくないでしょうか。(中川学)

リレーエッセイ 第13回

夏目漱石作品を朗読で味わう

朗読家　葉月のりこ

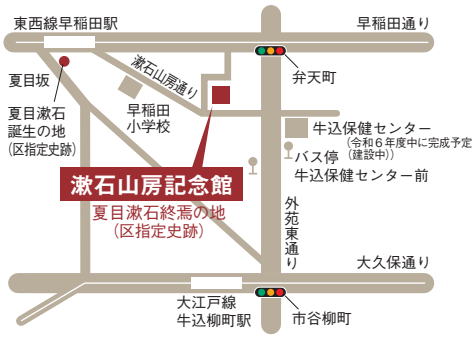
私達フォーエバーリーディングが夏目漱石誕生記念「2月9日朗読会」に出演させていただくようになってから早5年が経ちました。今までに『草枕』『吾輩は猫である～第二章～』『永日小品～モナリサ・人間～』『こころ』『虞美人草』『明暗』『三四郎』『吾輩は猫である～第三章～』などの作品を朗読しました。大人数で楽しく練習をしたことやオンライン朗読会の動画撮影で緊張したことなど、さまざまな出来事が思い出されます。

私が朗読をする上で一番大切にしているのは、〈自分なりに読み解く〉ことです。書いていないことにも思いを馳せてみる、その時間が朗読の深みに繋がるのだと信じています。そのためには、ゆかりの地を訪れることはとても大切です。作品への理解が深まり、今まで気づかなかったことにも気づかされます。

私は「夏目漱石・記念年グランドフィナーレ」で『門』を朗読することになった際、雑司ヶ谷のお墓に報告に参りました。『こころ』の墓参の場面にタイムスリップしたようで、突然「先生」が現れるのではないかと緊張したことを覚えています。その後、夏目漱石が円覚寺 帰源院に参禅した時の心持ちを想像しながら、円覚寺の中をゆっくり歩いてみました。『門』の主人公・宗助は「このような崖の下の横穴の中で、じっと考えていたのかしら」などと思いを巡らせながら、帰源院へ辿り着いた時、悟りを開くことができずに帰って行った宗助の苦悩に、ほんの少しだけ寄り添うことができたように思います。夏目漱石の文章は地の文の描写が素晴らしいだけでなく会話文から滲み出る登場人物の機微な心の動きを堪能することができるため、ぜひ声に出して表現することをお勧めします。何かの節にハッとさせられ繰り返し朗読することで新たな気づきが得られるかもしれません。

フォーエバーリーディングの合言葉は、「朗読は1人でも楽しいけれど、皆で読むと、もっと楽しい！」です。日本近代文学館でも10年以上、朗読会を開いています。皆様に楽しんでいただけるような朗読を目指し、これからも活動を続けて参ります。

Profile
葉月のりこ（はづき・のりこ）
朗読家。フォーエバーリーディング代表。プチプラージュ SETAGAYA 主宰。
（一社）日本朗読検定協会認定講師。「夏目漱石・記念年グランドフィナーレ」、夏目漱石参禅130年記念「新感覚で語る『門』」出演。



Access
【電車】東京メトロ東西線「早稲田駅」1番出口より徒歩10分
都営地下鉄大江戸線「牛込柳町駅」東口より徒歩15分
【バス】都営バス(白61)「牛込保健センター前」より徒歩2分
※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

- 所 在 地…東京都新宿区早稲田南町7番地
- 休 館 日…毎週月曜日(休日の場合は、直後の休日でない日)、年末年始(12/29～1/3)、展示替期間
- 開館時間…10:00～18:00(ただし入館は17:30まで)
- 観 覧 料…一般300円、小中学生100円、特別展開催時は別途定めます

新宿区立漱石山房記念館
TEL：03-3205-0209　FAX：03-3205-0211　https://soseki-museum.jp/

編集・発行　新宿区立漱石山房記念館（指定管理者：公益財団法人新宿未来創造財団）
表紙イラストレーション：中川学

※引用文中等に今日では不適切と思われる語句が見られますが、当時の表現表記を尊重し、そのままとしました。